

先人たちが守り育てた榎の松原を次の世代に継承していくために

(表から続く)

煮炊きする燃料とするばかりではなく、箱崎方面へ車力で運んで販売していたそうです。
このように松原は、海からの潮風と砂を防ぎ、私たちの財産や農作物の被害を食い止めるばかりでなく、美しい景観と恵みをあたえてくれるため、人々は松林に入り枯れ枝や落ち松葉を集め、林から持ち出し、それらのことが、松やキノコが元気に育つ環境を作ってきたのです。

松原存続の危機

ところが、1955年(昭和30年)代から、家庭の燃料が薪や炭から石油等の化石燃料に代わっていくなかで、人々は松原に入って落ち松葉や枯れ枝を集めなくなっていました。

その結果、松原は人の手入れが行われなくなり、他の樹木や草が生い茂り荒れて暗くなり、その枯れた葉などが肥料となり土が肥え、さらに松以外の植物が生い茂り、松を弱らせる悪い環境(土が肥え、湿った土)へと、松が育つ環境は悪化していき、弱った松が増えってきました。

さらに、外国から入ってきたマツノザイセンチュウという小さな線虫により、荒れた松原の弱った松に松枯れ被害も広まってきました。

新宮の30年前の松枯れがひどい時には、7000本の松が枯れたそうです。なかには樹齢100年を超す松も多く含まれていました。

2017年でも、1年に新宮地区で1800本以上の松が枯れていっているそうです。

国は、「マツクイムシ」による被害を防ぐため、薬剤散布や倒伐駆除(マツクイムシにより枯れた松の木を伐採し取り除くこと)等を行い、松原保全に取り組んでいます。

(参考文献)

- ・新宮町誌(新宮町誌編集委員会編、1997.1)
- ・新宮町歴史読本「わたしたちの町新宮」

白砂青松の榎の松原を継承していきたい！
とボランティア団体を結成(1998年10月)

先人達が、玄界灘からの潮風と砂から暮らしを守るため、一本一本苗を植え、手入れをし350年近くにわたって育ててきた榎の松原が荒れていき、松枯れにより失われつつあります。

松枯れを引き起こす「マツクイムシ」対策は国が行っていますが、松が元気に育つ環境づくりまでは手が回りません。

そこで、昔のような美しく元気な松原を取り戻そうと、地域の有志が集まり、「筑前新宮に白砂青松を取り戻す会」を結成(1998年10月)し、松苗の植林、下草刈り、松以外の雑木の伐採処理等を、新宮中学校や個人、各種団体、企業、新宮町役場等の人達と協力しながら、榎の松原の保全・再生活動に取り組んでいます。

(2017年の主な取り組み)

4月;九州電力新入社員の110名がボランティア体験活動を行いました。

11月;「勤マルの日」福岡県下の勤労者の人達のボランティア体験の機会を提供。また、地域の人達も参加し46名で、18日(土)に実施しました。

11月;新宮中学校「白砂青松タイム」の体験活動で1年生372名が22日(水)に実施しました。

12月;新宮町役場職員・新宮町議員有志との共同作業で約80名の参加で9日(土)に実施しました。

また、定例の作業を、毎月第1土曜日、9時～11時30分で行っています。

どなたでも自由に参加できます。草刈り機、鋸、鎌、松葉ほうき、チェンソー等あります。また、枯れ枝拾い、松葉掻き等の作業も行います。参加を希望される方は、事前にお問い合わせください。

榎の松原を次の世代に継承する為あなたも参加してみませんか!

「筑前新宮に白砂青松を取り戻す会」(事務局)

tell; 092-962-0760(近藤)

e-mail; singumatu@gmail.com

